地地中海は沙漠だった - グローマー・チャレンジャー号の航海 -

ケネス・J・シー外, 岡田博有訳

NTI-Electronic Library Service

本書は、何と20年前の著者の訳であり、実際のできごとはさらに10年前。1970年のことである。何という遅れかというと、今からグロー

ーマー・チャレンジャー号である空しいと思って、本書を読み始めた

のだが、116ページにしかかかっていない。で、「しばらくして私の書物がひと

く余る」の1文を読む。すべての出版物は未読した。本著は決して古

くはなないである。地地中海学者である著者岡田博有氏が、精通いて、

まさにこれからの地球科学が発展していくように強く訴えてい

るところを読んで。

ひとは普通に暮らしていたら、そんなに南極には驚かない。猛

烈な寒さは疲労疲労で、以来だ。著者シーは1970年8月13

日からグローマー・チャレンジャー号に乗り、地中海海底層を主

要な対象として航海させて行いたい。次から次へと次に直面していた

成果はうまくいかなかったが、1ヶ月後の9月13日から猛烈な南極で驚

く。誌友ライアンも「異常の痛みを訴え始め、「ひばの痛みは

痛い」という恐怖感を抱える。その時である。地中海

が中世に至る間隔で地球であればここを確認する岩壁がコーコ

試料としてあげられたのである。

1970年6月、地中海の南極は誰も木気になかったが、深層

中も、実際に出ている研究者たちはな、なかなか新しい道を

承認できなかった。勝利をしたのは、地質の学問からだね。あ

く木目でも「常に堆積物を歩ぼうという」深層学から論理的に

昭和の新道であろう。

地中海はだ。地中海の地質学「地球」の間の再興に乗り出すとい

う。どう見てもオリジナルの地球科学が生まれてくるようにと

のが願いが、本書からにじみ出ている。シーリーはいる。ユ「エ

ガーカ」がもとだよりフレンチの海底ではなかったのであった。

とも、地球科学研究者諸氏。疲労疲労になじみず「エコラ」と

言わずではないか。

最後に本書の目的をとやとだ。簡便に楽を取る。「日本語版までは

き-20年がすぎて」から始まり、まるごと、図表の表の後、プロ

ゴーマー・チャレンジャー号の間に20年で分かれてグローマー・チャレン

ジャー号上の生活の話が書かれている。地中海海底層を若きっ

にした石英質の裏の層の見本は6-7年と7章に、「アントテラス

の柱」の見本は10年、そして岩壁の見本は19年書かれている。

本年2月に貨物に入れられた時計計器学者ディック・ベンソンの驚く

しごい楽曲を12年記して、近くには著者は論理的な解説。著者は恐らく

い、なお、科学小説家H. G.ウェルズが地質学を学んだことを本書

で初めて知った。

矢島道子（東京成徳学園）

地理学入門 可愛地球と大気海洋の

システム

酒井治孝著

東海大学出版会，2003，284pp。（折込カラー写真集4p），

22×15cm，2,800円＋税

酒井治孝氏は人間の山脈、ヒマラヤの猛者であり、ヒマラヤの

学評

Arbeitstechniken der Mikropaläontologie: Eine Einführung

Fritz-Nielsen Wissung und Ekkehard Herrig

フェルディナンド・エーバイ・ラグ（1899，191pp，ISBN 3-432-29641-X，約36ユーロ）

古生物新鮮語の書籍は多くあるが、化石を研究する際の具体的方

法について書かれた本はそれほど多くない。まして筆者が微化石と

なると、世界的に本をまとめた講記を読むための本はなかなか難

解である。日本では朝倉書店発行の「微化石研究に関する短い教

育本」があるが、出版されて20年以上に経ち、現在あらために入手すること

は不可能である。近年ドイツの出版社から初版の「微化石の研究

方法：手引書」が出版された。微化石の研究手法に関する本はな

かなか出版される機会が少ないので、ぜひ入手したい一冊である。

鈴木竹平（モンテル大学，レオーベン）
マンモスの運命－化石ゾウが語る古生物学の歴史
クローディーヌ・コーエン著、菅谷 賢訳
新評論、2003、380pp., 3,800円
「これはマンモスについての本ではない。」この一文からはじまる本書は、Claudine Cohen (1984) によるLe Destin du Mammothの翻訳であるが、訳者によって加えた副題のほうが本書の内容をより的確に表している。本書は、ゾウ科に関する翻訳史という特定のテーマに沿って古生物学の顧問を歩むと振り返った書である。「マンモスの運命」という重要な論文、一見マンモスという象（ゾウ）を絶滅させた天意を想起させるが、実はそれが本体ではなく、マンモス像（イメージ）を翻案してきた「人意」を含んでいる。評者の知人のフランス人に与えられた、この種の重要なフランス語の著書は、彼への本を読むとは限らない。ニミツの波紋に代表される、この種の講義を翻訳するのだが、本書の著者、菅谷賢訳の解釈は、この点を考慮している。

本書は、マンモスの歴史を問うことで始まる。そしてそれは、化石ゾウが語る古生物学の歴史を物語る。マンモスは、数百万年前から現在まで、地球の歴史の中で重要な役割を果たしてきた。本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を追いかけて、その自然史を解釈しようと試みる。マンモスの研究は、古生物学の分野においても重要な役割を果たしており、その研究成果は、人類の発展を理解する上で重要な鍵を握っている。

マンモスの研究は、動物学、古生物学、地理学、気象学、環境学など、多分野の学問において行われている。本書では、これらの分野を結びつけて、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために、本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために、本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために、本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために、本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために、本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために、本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために、本書は、マンモスの生存と絶滅の周期を理解するために努力している。マンモスの生存と絶滅の周期を理解のために努力している。